２０２３年１月２９日顕現後第４主日

旧約聖書　ミカ書 6 章 1-8 節
使徒書　　コリントの信徒への手紙一 1 章《18-25》26-31 節
福音書　　マタイによる福音書 5 章 1-12 節

先週は、今年初めての鶴巻集会がありました。本日から２月１２日に行います堅信受領者総会の資料を配布・送付いたします。今年は対面式で開催です。また、２月２２日の大斎始日に向けて、聖堂で棕櫚の十字架を集めております。新しい年が歩み始めていることを改めて実感いたします。

さて、聖書日課の使徒書は、引き続き「コリントの信徒への手紙一」です。本日は、１８節から２５節が《》に入っています。しかし、この《》の部分で、パウロは神学的に重要な事柄を提示しておりますので、この箇所も含めて学びたいと思います。

最初に「**十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。**」（1：18）とありますが、この節は、神学的に大切な図式を提示しています。その図式は、「十字架」という言葉で象徴されています。「十字架」は、ローマ帝国内に住んでいる人であるならば、必ず知っていると思われる処刑方法ですが、それゆえに、非信仰者の観点では、罪、滅び、死、敗北、弱さ、愚か、そして恐怖の象徴にほかなりません。しかし、信仰者の観点では、すべてが逆転し、赦し、救い、命、勝利、強さ、知恵、そして慰めの象徴となります。パウロはこの大切な神学的逆転の図式を、この一節で述べているのです。そして、この逆転は、最初の教会の人々にとって、すべての見方が変わるような、とても衝撃的な言葉であったと思います。

パウロは、この言葉をイエス様の十字架と復活から見出したのですが、『聖書（旧約）』にその根拠があることを示します。「**わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにする**」（1：19）。この言葉は、細部は少し異なりますが「イザヤ書」２９章１４節からの引用です。ここからパウロは、「**知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる**」と論を展開するのですが、それはこの逆転の図式が『聖書（旧約）』的な思想においてすでに示されていたことを現します。真の知恵や賢さとは主なる神様にあり、知恵や賢さはすべて主なる神様から来るのですが、人間はそれを忘れる存在です。そして、知恵と賢さを自分が発見し自分のものだと思います。しかし、人間の発見した知恵や賢さ、すなわち理性と判断で、主なる神様の出来事を理解することはできないのです。同じようにイエス様の十字架と復活も、そのような人間的な知恵では、理解することができない、パウロはそのように主張するのです。

ただし、ここで「人間」といった場合、『聖書（旧約）』的な範囲では、『聖書』を大切にしようとするイスラエル・ユダヤ人そして最初の教会の人々に限定されているといえます。しかし、パウロは、この理解が『聖書』の世界に生きる人々だけではなく、すべての世界の人々に及ぶと述べていきます。なぜならば、「**世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかな**

っています。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになった」（1：21）と述べ、その十字架を記しとした逆転が、「宣教」を通して世界に伝えられるからです。

ここにある「宣教」という言葉は、パウロ神学にとって、そして教会にとっても大切な言葉です。それは、イエス・キリストの十字架と復活を伝えることです。最初に述べた通り、十字架とはローマ帝国の処刑方法です。ユダヤ人であるイエス様が、その処刑方法で死んだこと、そこに大きな意味があります。十字架は、イスラエル・ユダヤのみならず、その周辺世界のすべての人にとって、共通の負のしるしであるからです。そして、それが残虐であり、負のしるしであることは、時間と空間を超えて変わりません（想像したくありませんが、現代はもっと残虐なことが行われているとは思います)。それゆえに、十字架が、神学的な逆転のしるしであることは、いつの時代においてもかわりません。この十字架に救いを見出せますか？そのような問いかけが「宣教」という行為にほかならないのです。

さて、この「宣教」という言葉は、２０世紀以降の現代の教会では、その意味が問い直されています。「伝道」とどう違うのかという問い、「外向き」「内向き」というような方向性の問題、「社会問題」「政治問題」「環境問題」などこの地上のあらゆる「問題」と関わらせるか否かなども問われています。それゆえに、現代は「宣教」という言葉の意味が極めてあいまいになり、人間の思いと知恵で、自由に使える便利な言葉になっているといえるかもしれません。これは、何とも言えない皮肉な現象です。しかし、本日の箇所で見た通り、『聖書』に基づいて「宣教」を考えるならば、イエス様の十字架と復活から離れては、「宣教」とは呼べないのです。それゆえにパウロは、「**わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものです**」（1：23）と続けます。『聖書（旧約)』を良く知っているユダヤ人にも、『聖書』を知らない異邦人にも、衝撃的な十字架を宣教すると述べるのです。

コリントの教会は、すでにこの「宣教」に関する事柄でも混乱があったと思います。その混乱原因は、「何を伝えるか」ではなく、「何を伝えられたか」であり、そこから何をすべきか、という点です。それゆえにパウロは、「**兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを、思い起こしてみなさい。**」（1：26）と述べます。そして最後に、「**『誇る者は主を誇れ』と書いてあるとおりになるためです**」（1：31）とこの部分をまとめます。この言葉も「エレミア書」９章２３節の引用です。

この箇所で、パウロが語ろうとしていることは、十字架を通して召された者のあり方です。その根底には、主なる神様の価値観と人間の価値観の逆転があります。その逆転においてユダヤ人も異邦人もありません。わたしたちもそこに含まれています。わたしたちの教会は、東京教区の中で長い歴史を持ち、人材的に物理的にも様々な豊かな賜物を持っています。そのようなわたしたちの教会であるからこそできる宣教の歩みに、今年も励みたいと思います。